やまなし
医療最前線
コロナとの闘い
県立中央病院から
〈207〉

前島誠
臨床検査技師

弘津陽介
研究員

自施設でPCR検査 8千件超
感染、治療効果 正確に把握

新型コロナウイルス感染の判定には正確な検査が欠かせない。山梨県立中央病院は、早い時期から独自のPCR検査の体制整備に着手。精度向上に力を注いでいる。

県立中央病院2階にある微生物検査室。この部屋には感染が疑われる患者の検体が日々持ち込まれ、陽性、陰性の判定が行われている。PCR検査で県内屈指の前線基地だ。

準備は1月29日に始まった。中国湖北省武漢市を中心に感染者が拡大し、日本国内でも感染が確認されて間もない時期と重なる。32年前にPCR理論を研究に取り入れ、日本で最初の機器開発を行った小俣政男理事長の指示によって開始した。

新型コロナのPCR検査に用いる機器を導入し、保険適用（3月6日）直後の3月10日には自施設で検査を開始。感染が疑われて受診した患者のほか、内視鏡検査などで医療従事者への感染リスクが高い患者、新規・緊急入院患者、妊婦などを対象に行い、検査数はすでに8千件を超える。

現在、PCR検査を担うのは7人の臨床検査技師だ。外部に空気が漏れない陰圧室で検体から核酸を抽出。試薬を加えてから機器で測定する。結果が分かるまで3～4時間程度。新型コロナ由来の核酸があれば、温度の上げ下げによってコピーが増えていき検出できるようになる。

検査体制整備に中心となって関わるゲノム解析センターの弘津陽介チーフ研究員は、検査で特に注意している項目の一つとして、感染していないにもかかわらず陽性となる「偽陽性」を挙げる。偽陽性は検体の取り違えや汚染（コンタミネーション）のほか、検査感度の高さによる非特異的な反応が要因として考えられる。

弘津研究員は「100パーセント正確な検査法はないが、データを積み上げ綿密に準備をした」とした上で「PCR検査の再検査や、他の検査手法（抗原検査、抗体検査）を組み合わせることで、正確なウイルス診断が可能で、感染者の早期発見のみならず患者の感染状況や治療効果の正確な把握に役立つ」と強調する。

PCR検査は機器による全自動化が進むほかの検査と異なり、人の手による作業が多い。日々、検体と向き合う前島誠主任臨床検査技師は「偽陽性に注意し、緊張感を持って作業に臨み、データを慎重に見極めている」と話す。

医療関係者の間では今冬のインフルエンザとの同時流行を危惧する声もある。県立中央病院は、インフルや新型コロナを含む複数のウイルスの有無を同時に30～40分で確認できる最新の全自動PCR機器（FilmArray）も所有し、すでに300検体を解析している。迅速な判断につなげる目的で、インフル流行期に活用することも視野に入れる。

＝第2、4木曜日に掲載します

掲載日：2020年09月10日／ぶんくら／紙面頁012
紙面・記事・写真・イラスト等の無断掲載・転用はお断りします。Copyright 山梨日日新聞社